特定非営利活動法人
タンチョウ保護研究グループ会誌
2010 年 7 月

もくじ

幅広い活動を目指して　・・・・1

ロシア・ムラビオフカ自然公園で開かれた国際会議に出席　・・・2

ロシア・ダウルスキー自然保護区を訪問　・・・・・・・・・・2

2009 年度 活動・財務報告　・・4

今年の調査も進んでいます！・・7

昨年の調査の報告論文ができました・・・・・7

標識物語　第 9 話　・・・・・・8

事務局だより　・・・・・・・・・10

幅広い活動を目指して

理事長　百瀬邦和

全国的に吹き荒れている？「事業仕分け」の影響でしょうか、国の調査関係予算の減少で今年の飛行機による繁殖期の調査は 4 月の 1 回しかできませんでした。タンチョウの繁殖つがい数の把握は当グループの調査活動の柱のひとつなので、5 月の第 2 回飛行調査ができないのはとても残念です。タンチョウ保護研究グループとしては、独自財源を確保していくことで基本的な調査活動を継続していかなければと考えています。日本に限らず、大陸も含めたタンチョウの調査保護活動を進めるためにも、組織の体制を工夫していく必要があるのではないかとの議論が理事会で行われています。今年度は、中標津の自然を知ろう会、キナシベツ湿原を愛する会との共同事業、ロシアの自然保護区との交流も始まっています。今年から正式に発足した国際タンチョウネットワークに協力して各国メンバーとの活動を進めるために、事務局の体制を強化する必要も感じています。

タンチョウ保護研究グループは法人化してから 4 年目に入り、会誌 Tancho は今号が第 10 号となります。新しい役員や会員の皆様の協力を得て、団体としてのバージョンアップを目指します。

ロシア・ムラビオフカ自然公園で開かれた国際会議に出席　百瀬邦和

5月28日から6月3日にかけて行われた「国際ツルワークショップ（気候－ツル類－人々）」と、平行して行われた世界自然保護連合／国際湿地保全連合の所管するツル類専門家会議に出席してきました。会議の開かれたムラビオフカ自然公園はロシア極東のハバロフスクから600km程西にあるブラゴヴェシチェンスク市に近いアムール川沿いの湿原です。同公園は1994年に設立されたロシアで初めての民間管理の自然保護区で、釧路湿原の1/3近い5,200haの広さがあります。

会議には国際ツル財団、国際湿地保全連合、東アジア･オーストラリア地域フライウェイ･パートナーシップなどの国際組織を含む13ヵ国から31名が参加しました。日本からは私1人だけの参加でした。会議では、内陸部での降水量の減少によってツルの営巣する湿地環境が失われたり、冬季の気温上昇によって越冬地が北上しているなど、気候変動によってツル類の生息状況が影響を受けている様子が報告されました。また、ツルによる農作物への食害ばかりでなく、人間の経済活動による水辺環境の変化や観光による悪影響なども報告されました。これらの一部は、タンチョウ保護研究グループが昨年まで3年間行ってきたタンチョウ保護のための国際会議の中身と重なるものでしたが、地理的にも社会的状況もタンチョウとは異なっている南アフリカで、国鳥であるハゴロモヅルが土地と水をめぐって農業者と深刻な状況にあり、近年急速に数が減っているという報告が印象的でした。南アフリカには釧路地方でタンチョウの電線への衝突事故対策として使われているプラスチック製マーカーの資料を送ることになっています。

参加者全員で記念写真

ロシア・ダウルスキー自然保護区を訪問　百瀬邦和

北海道東部地域はタンチョウ生息地の東の端にあたりますが、西の端はロシアとモンゴルが国境を接するダウリア地方です。ダウリア地方はアムール川の源流域にあたり、10年程前にダウルスキー（州立）自然保護区のゴロシュコ博士の発表があるまで、タンチョウの生息はほとんど知られていませんでした。タンチョウ保護研究グループが行ってきたタンチョウ保護のための国際会議に参加されたゴロシュコ博士との情報交換により，同地方は大部分が丈の低い草原からなるステップで、ゆるやかなすり鉢状の沼地や河川沿いの湿地がツル類の生息地となっていること、タンチョウのほか、マナヅル、クロヅル、アネハヅルが繁殖していること、保護区では野生動物の密猟や野火対策に力を入れていること、夏休み

の時期には環境教育活動を積極的に展開していることなどがわかりました。

今回、地球環境日本基金の助成を得ることによって、６月 17 日から 23 日までの７日間現地に滞在して、北海道とは大きく異なっている大陸内陸部に生息しているタンチョウの繁殖環境を直接観察することと、タンチョウ保護研究グループが今後取り組もうとしている人間の経済活動との調整のための環境教育活動の様子を見学してきました。

ダウルスキー保護区に近いツァスチェイ村にある事務所はビジターセンターを兼ねていて、家族連れや小中学生が訪れて保護区の自然や事務所の活動を

ビジターセンターの展示／レクチャー室

学んでいました。保護区内にあるレンジャーが駐在するステーションには古い客車を利用したゲストルームが数棟（台？）あり、大学生十数名がサマーキャンプ中で、１－２名の大学教官や保護区の研究員の指導を受けながら、夏休み中の１ヶ月以上滞在して自然環境の現地調査を行っています。大学で

サマーキャンプの宿舎（戦車で運んできた）

生物など理科系を選考している学生は６－８月の夏休み中に、こうしたサマーキャンプが義務づけられているとのことです。大草原のまっただ中で、自然保護区と教育機関の活動が積極的に連携している様子にとても感心させられました。ダウリア地方は乾燥地帯のため、降雨量によって湖の水位や植生の状況、それに伴う鳥類の繁殖や渡来数などが年ごとに変わるようです。学生たちは、自分たちの研究が自身のトレーニングになると同時に貴重な資料になることを自覚しているのでしょう、熱心に活動していました。

北緯 50 度の北国ですが、連日の猛暑と蚊やアブの飛び回る中でのキャンプ生活です。学生たちはほとんどが都市生活者で、自炊も初めてという人が多いということですが、楽しそうにしていました。こうした環境の中から層の厚いタフな研究者が育ってくるのだと実感させられます。実際、今回のパートナーであるゴロシュコ博士は、ウクライナでの学生時代にサマーキャンプで訪れたのをきっかけにダウ

鳥を調査中のゴロシュコ博士とアナスターシャ研究員

ルスキー自然保護区で働くことに決めたそうです。

ダウリア地方は日本に冬渡来するマナヅルやカモ類の繁殖地として、またアムール川を通しても日本と関係があります。今回ロシア内陸部の自然を知ることで、日本の自然の特徴を再認識できたことはとても貴重な経験でした。これを機会に、日本の多くの人達、特に若い学生さんたちがタンチョウの住む道東とは違う自然を学べる機会を作っていきたいと思っています。

かつて湖底だったアシ原をドライブ

2009 年度　活動・財務報告

◇ 2009 年度の活動状況をお知らせします。

○タンチョウ繁殖状況委託調査・タンチョウ繁殖状況調査

繁殖期の飛行調査を 4 月 20 日から 5 月 2 日まで、また､5 月 25 日から 6 月 10 日までの計 2 回行なった。

一回目は釧路湿原を北海道開発局のヘリコプターで、残りはセスナ機により調査した。飛行時間はヘリコプターで 11 時間 30 分、セスナ機で 40 時間 42 分の計 52 時間 12 分となった。二回目は一回目と同様に釧路湿原を北海道開発局のヘリコプターで、残りはセスナ機により調査したが、網走地方の飛行調査はしていない。ヘリコプターでは 12 時間 31 分、セスナ機では 34 時間 32 分の計 47 時間 3 分調査した。

２回の飛行調査の結果に、これとは別に環境省が行ったサロベツを含む道北地域での調査結果、および地上からの観察と聞き取り情報の結果を統合すると、繁殖つがい数は 361 となった。

○タンチョウ標識調査

2009 年 6 月 13 日に釧路市内、6 月 14 日に帯広市内で事前説明会を実施した。十勝、釧路、根室地方で予備調査を行なったのち、捕獲・標識調査を 6 月 20 日より 8 月 16 日まで､計 17 日間実施した。参加者は計 52 名、のべ 216 人で、28 羽のヒナに標識した。

○標識鳥追跡調査

標識鳥確認のための追跡調査を繁殖地および中継地、越冬地等で行い、156 羽の標識個体の生存とその状況を確認した。

○タンチョウ総数調査

2010 年 1 月 16 日に釧路市内で事前説明会を実施した。調査は 1 月 21 日から 31 日まで、幕別町忠類､大樹町中島地区周辺､鶴居村中雪裡､同下雪裡、釧路市阿寒町 23 線、音別町中音別、標茶町中茶安別、茅沼駅前の給餌場で一斉調査を行ったほか、根室・釧路・十勝の各支庁管内で現地調査と聞き取りにより越冬状況を確認した。参加者は計 42 名、のべ 123 人であった。その後に確認された標識個体等の記録を総合すると、総数は 1,235 羽となった。

○営巣適地解析

環境省の委託 (請負業務) により、タンチョウ営巣適地解析をおこなった。

○残留重金属の分析（サントリー世界愛鳥基金助成）

タンチョウの餌資料、タンチョウを含む斃死鳥類について、寺岡理事の研究室で分析を行なった。

○講演・講習会

・ 2009 年 4 月 4 日に釧路市立博物館に於いて、報告会「タンチョウをめぐる旅～中国・韓国の越冬地のツルたち～」を行った。

百瀬邦和（タンチョウ保護研究グループ）「中国越冬地をめぐる（塩城保護区・黄河三角州)」

冨山奈美（タンチョウ保護研究グループ）「韓国越冬地をめぐって（非武装地帯に越冬するツルたち)」

・2009 年 10 月 22 日､釧路市観光国際交流センターに於いて、講演会「危機に瀕したツルたち」を開催した。

パーク ヒーチョン博士（韓国慶北国立大学教授）「朝鮮半島におけるツルの生息地における危機」

ス リーイン博士（国際ツル財団研究員・中国東北林業大学客員教授）「中国内陸ホルンバイル　高原とソンネン平原のタンチョウ」

・ 国際ワークショップ期間中の 10 月 25 日、北海道立釧路芸術館に於いてタンチョウ国際会議記念講演会「タンチョウの希望ある未来への序章」を開催した。

祝辞：蝦名大也（釧路市長)、市田則孝（バードライフインターナショナル副会長）

基調講演：高円宮久子妃殿下（バードライフイン

ターナショナル名誉総裁）「鶴に思いをはせて」

講演：正富宏之博士（タンチョウ保護研究グループ理事）

「タンチョウと暮らすためにー国際会議の意図と課題ー」

セルゲイ・スミレンスキー博士（ロシア ムラビオフカ自然公園創設者）

「アムール川中流域におけるタンチョウ保護の実践と課題」

ギュンター・ノヴァルト博士（ドイツ ツル情報センター所長）

「ツルと人々」

ジョージ・アーチボルド博士（タンチョウ保護研究グループ理事）

「世界のツル保護のための国際ネットワーク 」

○提言等の事業

・ 十勝川築堤工事に際してのタンチョウに配慮すべき注意事項について

今年度、十勝川流域で計画されている築堤工事について、タンチョウの生息に悪影響を与えないよう、工事の時期、注意事項についてコメントした。

・ 北海道根室支庁農地課が事業を予定している草地改良事業、農道改修工事等について

タンチョウの生息に悪影響を与えないよう、工事の時期、注意事項についてコメントした。

○会報の発行・ホームページ制作等

ホームページのデータ部分を最新の数字に更新するとともに、What's New! のページに記事を年度内に 13 回更新した。

会誌「Tancho」第 7 号を 2009 年 7 月に、第 8 号を 2009 年 11 月に、第 9 号を 2010 年 3 月に発行した。また、2009 年 10 月に TKG ニュース 49 号を発行し標識調査および冬期カウント調査の参加者ほかに送付した。

○出版物発行等（標識個体の情報展示）

11 月に阿寒国際ツルセンターと日本野鳥の会 鶴居･伊藤タンチョウサンクチュアリに置いている「標識鳥ファイル」を最新の記録に更新した。

○タンチョウ保護のための国際ワークショップ（地球環境基金助成）

2009 年 10 月 21-26 日の 6 日間、中国・韓国・ロシア・ドイツおよび国際ツル財団から計 12 名を招聘し、日本の 13 名を交えて釧路市観光国際交流センターと全日空ホテルで集中討議を行なった。ワークショップでの発表と討議の内容は報告書にまとめ、2010 年 3 月末に印刷した。

大陸でのタンチョウ調査を開始する為に、ヨーロッパで使用されているクロヅル用のプラスチック足輪をモデルにタンチョウ用の新たなサイズの足環をドイツのメーカーから購入した。

○中華人民共和国におけるタンチョウの繁殖状況把握調査（イオン環境基金助成のほか、GEF のシベリアプロジェクトと EU 中国生物多様性プロジェクトの助成金、およびダライ湖国家級自然保護区の協力による）

中国内モンゴルにおいて、タンチョウ保全の施策に要する科学的データを得ることを目的とした調査で、ス リーイン博士（国際ツル財団）ほか、リュウ ソンタオ（ダライ湖国家級自然保護区副所長）以下同保護区研究員と東北林業大学学生、中国科学院　チャンチュン地理学および農業生態学研究所のメンバーが調査に参加し、2009 年の 4 月 20 日から 5 月 15 日、6 月 5 日から 20 日、9 月 25 日から 10 月 13 日に実施した。調査の結果、ホルンバイルにおけるタンチョウの個体群サイズと分布域を把握することができた。春季に 46 羽、夏季に 24 羽、秋季に 17 羽のタンチョウを記録し、以前のデータと比較すると、今年のタンチョウ個体数は少ないことがわかった。この結果については、10 月 22 日、釧路市観光国際交流センターにおける講演会で、ス リーイン博士が発表した。

○傷病個体の保護収容への協力、等

今年度は保護収容の為の活動は無かったが、死亡個体（ヒナ）の収容作業を行った。

○俵橋湿原プロジェクト

タンチョウの越冬地を分散させる目的で、2009 年より営農を放棄することになった標津俵橋大規模草地内の 10 アールの放牧地を開墾してトウモロコ

シ畑を耕作したが、例年になく多い雨量と日照不足が重なって収穫は得られなかった。近隣の農家の協力を得てニオを設置し、中にポリバケツを入れてデントコーン粒の給餌を行った結果１つがいを越冬させることに成功した。

次年度以降の計画について、中標津の自然を知ろう会メンバーと打ち合わせを行った。

○キナシベツ湿原プロジェクト

今年度は実際の活動は無かったが、次年度以降の活動に向けた打ち合わせ等を行った。

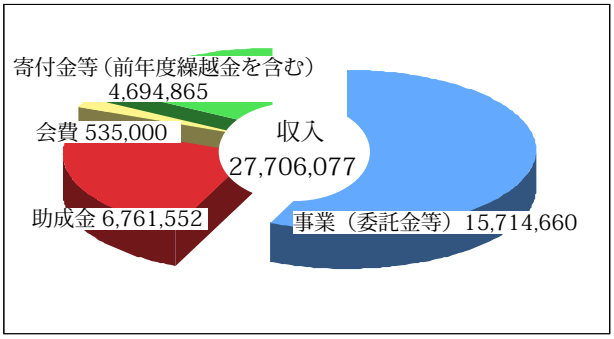
○ロシアダウリア地方と北海道東部地方とのタンチョウと湿原保護に向けた環境教育活動推進（地球環境日本基金助成）

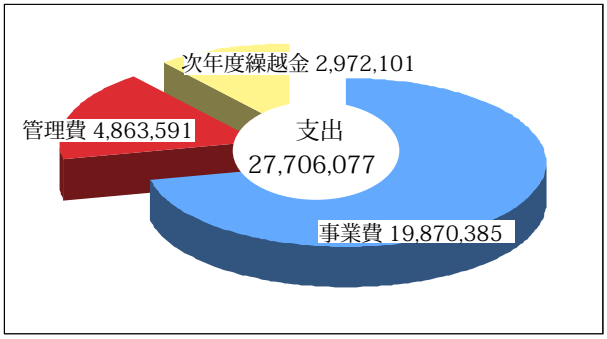
タンチョウ保護のための国際ワークショップに合わせて、ロシアからエレナ・イリヤシェンコ氏とオレグ・ ゴロシュコ博士を招聘し、活動推進に向けた打ち合わせと、資料類の確認、互いの現場の体制等について確認した。また、活動推進の為の資料とするためのタンチョウ用のプラスチック足輪を作成した。

○世界のツル関係者との交流及び情報交換、等

問い合わせ等に対する連絡を行った。

2009 年度会計収支　（単位　円）





2010 年度事業計画

◎ タンチョウその他ツル類の生態及び生息環境調査・研究事業

・タンチョウ繁殖状況調査
・タンチョウ標識調査
・ タンチョウ総数調査
・ 生息適地解析
・ タンチョウの食害対策委託事業
・ 標識個体の生存確認
・営巣地地上調査
・ 放鳥タンチョウの PTT による追跡

◎ タンチョウその他ツル類保護に関する 教育普及事業

・タンチョウその他ツル類に関する講演・講習会

◎ タンチョウその他ツル類に関する提言及び情報発信事業

・会報の発行・ホームページ制作等
・ 出版物発行等（標識個体の情報展示、等）
・ 提言等の事業

◎ アジアに生息するツル類保護に関わるネットワーク推進事業

・ 国際タンチョウネットワークのための事業
・ 中国における繁殖状況把握調査
・ ロシアとの環境教育活動推進

◎ タンチョウ保護に関わる機関・施設との連携及び受託事業

・ 傷病個体の保護収容への協力、等
・ 俵橋湿原プロジェクト
・ キナシベツ湿原プロジェクト

◎その他この法人の目的を達するための事業

・ 世界のツル関係者との交流及び情報交換、等

※今期の役員が決まりました。

理事および監事の任期満了にともない 5 月 23 日に開かれた総会によって新規役員が決定しました。また、総会後に臨時に開かれた理事会で、理事長と副理事長が再任されました。新役員の方々は以下の通りです。なお、定款の規定により、任期は 2012 年までの 2 年間となります。

理事長：百瀬邦和	理事：石　弘之	理事：花輪伸一	理事：山根みどり
副理事長：正富欣之	理事：胡　東宇	理事：正富宏之	監事：井上雅子
理事：Archibald, G.W.	理事：寺岡宏樹	理事：宮田春夫	監事：宮崎俊次

今年の調査も進んでいます！

★繁殖状況調査

4 月 27 日から 5 月 5 日まで、セスナ機による上空からの繁殖状況調査が行われました。今年は春先の天候もよく、まずまずの営巣が確認されました。例年は 5 月下旬から 2 回目の調査が行われるのですが、国の調査予算の削減もあり、2 回目は 5 月 18 日に十勝川周辺を調査しただけに留まりました。セスナ機を使った調査は高額なため、国の予算に頼る部分が大きくあります。その後、地上からの調査を行い、結果を集計中です。

★標識調査

今年は宮崎県で発生した口蹄疫を気にしながらの調査となりました。タンチョウの繁殖地は日本一の酪農地帯でもありますから、もし口蹄疫が侵入したら一大事です。何しろ釧路・根室地方では人口より牛口（牛の数）の方が多いのです。酪農家が部外者の出入りに神経を尖らせていないわけがありません。牧場の進入路には、もれなく消毒用の石灰が撒かれています。そんな状況下で始まったタンチョウの標識調査ですので、今年は牧場周辺での作業を自粛することにしました。幸い根室市や浜中町などの、牧場から離れた干潟でヒナが育っていたので、主にこちらで調査をすることにしました。

干潟での捕獲作戦にはカヌーが欠かせません。ヒナは岸の草むらに人の気配を感じて危険と判断すると躊躇なく沖に向って泳ぎだすからです。写真はカヌーで捕獲したヒナに足環を付ける作業のため、カヌーごと岸まで引っ張りあげているところです。浅い干潟ではカヌーは座礁してしまい動けなくなってしまうからです。

問題なのはこの地域の湖沼をとりまく森林にはヒグマが棲んでいることです。調査員はできるかぎり固まって歩き、もちろん熊鈴は鳴らしていますが、糞や足跡が無いか、フキが食べられているのはシカ？クマ？ 気にしながらの作業です。

★　昨年の調査の報告論文ができました。

昨年の１月に行ったタンチョウ生息状況調査の結果が論文となってまとまりました。「北海道で2008-2009 年冬に記録したタンチョウ個体数」というタイトルで阿寒国際センター紀要第９号に掲載されました（2010 年発行。正富宏之、百瀬邦和、古賀公也、正富欣之、井上雅子、松本文雄、冨山奈美共著）。集計した結果、2008-2009 年の越冬が確認されたタンチョウは 1,324 羽で、過去最高を記録しました。北海道のタンチョウは依然として増加を続けていると考えられます。釧路市阿寒町タンチョウ観察センターでは 269 羽、鶴居村の鶴居・伊藤タンチョウサンクチュアリでは 327 羽、鶴見台では 271 羽、音別町の給餌場では 128 羽が確認され、それ以外の小規模の越冬地で 329 羽が確認されました。大規模越冬地に集まらず、家族など少数で越冬するツルが増えてきています。また、中国や韓国などの情報を参考にすると、世界では 2,800 羽程度のタンチョウが生息していると推測されています。

シリーズ　標識物語　　～名前の付いたタンチョウ～

第９話　ウチの娘たち（017 － 069 － 104 － 105 － 112）

西岡　秀観

「ウチの娘たち」と言ってもタンチョウのことです。タンチョウ保護研究グループは、毎年今頃バンディング（標識付け）の真最中です。私が初めてバンディングに参加した 2005 年、運良く捕まえられたのが 017（2005 年生まれ、♀：写真１）です。草地の明渠（めいきょ：排水路）に潜り込んで、じっとしていたところを捕まえました。初めてタンチョウ（しかも幼鳥）に触れた時は、犬やネコとは違う「もっと壊れやすいモノ」に感じ、経験者に手渡すまではドキドキしました。標識付け、身体計測、採血を終え、親に帰すまで一緒にいました。無事に親と合流したのを確認した時には、ホッとしたのと同時にちょっとした寂しさも感じました。私の手にはまだ暖かい感触が残っていたように感じられたので。

写真１　017（2010 年１月）

その年の冬は、12 月 23 日に阿寒の給餌場で親子無事な姿が確認されました。その姿を見て、「よかった、無事育ってくれて。」と、もう親バカの気分でした（写真２）。標識は生後一月半くらいの幼鳥に付けますが、その後も飛べるようになるまでに外敵に襲われることがありますので、姿を確認するまでは心配でした。

写真２　017 幼鳥期（2005 年 12 月）

春になり、子別れを果たした後、故郷に帰ったという情報をいただき、また次のシーズンはどこで会えるか楽しみと不安が入り交じった気持ちでした。2006 年シーズンは、12 月９日に音別の給餌場に姿を現し、どうやらお相手が出来たようです（写真３）。前にも書きましたが、若い頃は繋がりが弱く別れることもありますし、メスはオスに付いていくので繁殖地をどこにするのかわかりません。そして、相手には標識が付いていないので今後どこに行くのか不

写真３　017 カップル（2007 年２月）

安でした。2007 年シーズンは 12 月いっぱい目撃情報がなく、「ダメだったか・・・。」と諦めていたところ、2008 年 1 月 7 日に音別の給餌場で確認され、翌週 13 日に私は再会を果たしました。最年長の標識個体よりも、会ったときの気持ちはやはり違いますね。

そろそろ繁殖適齢期にもなってきたので、早ければ来シーズンにもヒナが生まれるのではないかとなった 2008 年シーズンは、夏場の目撃情報をいただき、どうやら繁殖には失敗したようです。秋になり、釧路方面とは逆の西へ２羽で動いているという情報が入ってきて、「越冬は十勝でするのかな？音別には来ないか・・・。」と、この年は再会を完璧に諦めたところ、2009 年 1 月 4 日音別給餌場で再会しました（写真４）。

写真４　017（2009 年１月）

2009 年シーズンは夏場の目撃情報がなく、「また音別で会えるでしょう。」と強がっていたところ、12 月 23 日に音別で確認されたとの連絡があり、正直ホッとして、同月 29 日に会いました（写真５）。2009 年シーズンも子供を連れておらず、「おじいちゃんには、まだならないか・・・」と喜びと残念半々の気持ちで過ごしました。

これまで私が捕まえた個体は 017 以外にもいて、2008 年シーズンには 069（♂）、2009 年シーズンは３羽（104：♂、105：♂、112：♂）います。捕まえた順番に上から長女、長男といったように呼ぶと、長女（017：2005 年）、長男（069：2008 年）、次男（104：2009 年）、三男（112：2009 年）、四男（105：2009 年）となります。長男は、その年の夏に繁殖地で姿が見えなくなり、兄妹の 070（♀）だけが確認されていました。2009 年シーズンの３兄弟で、次男は親（52V）と一緒に冬期調査で１度、確認されましたが、現在は不明です。三男は秋に鶴居村で姿を確認されていましたが、冬期の調査では標茶町で兄弟の 113（♂）と親だけが確認されましたので死んでしまったものと思われ、その間に何かが起きたのでしょう。四男は、音別の給餌場に来ていて同年 12 月 29 日に再会しました（写真６）。

写真５　017（2009 年 12 月）

写真６　105（2009 年 12 月）

私以上に多く捕まえている人も当然おり、その人にとってはこのように感情移入すると子供がたくさんいて大変でしょうね。皆さんもこのような体験（その後の追跡調査で一喜一憂して大変ですが）をしたい方は、是非ともバンディングに参加していただきたいと思います。

次回は、第 10 話「キャップが・・・(K18)」を掲載します。お楽しみに。

事務局だより

＜活動記録（2010 年 4 月～ 2010 年 7 月）＞

2010 年

3 月 31 日　会誌「Tancho」第 9 号発送
4 月　3 日　運営会員連絡会
4 月 12 日　サントリー世界愛鳥基金贈呈式出席（於：東京）
4 月 26 日～ 5 月 5 日　タンチョウ繁殖状況調査
5 月　7 日　運営会員連絡会
5 月 18 日　十勝川流域のタンチョウ繁殖状況調査
5 月 22 日　理事会開催（於：ときわ台ヒルズ）
5 月 23 日　総会，臨時理事会開催（於：釧路市中部地区コミュニティーセンター）
5 月 23 日～ 6 月 4 日　国際自然保護連合種の保存委員会ツル類専門家グループ会議（ロシア・ムラビオフカ自然公園）に出席（百瀬）
6 月　4 日　運営会員連絡会
6 月 13 日　俵橋湿原でのタンチョウ冬期餌用のトウモロコシ種まき
6 月 15 日～ 6 月 24 日　ロシア・ダウルスキー自然保護区に出張（百瀬）
6 月 27 日～　タンチョウ標識調査
7 月　1 日　運営会員連絡会

＜繁殖調査余話＞

カラスに卵を狙われたツル

タンチョウの天敵はヒナを襲うキツネや野犬オジロワシなどがいますが、カラスも要注意です。カラスは賢く、親の隙をみつけて卵やヒナを襲うといわれていますが、今年の繁殖調査では、その現場に（上空から）遭遇しました。

親が巣から離れている時にカラスが巣に降りていて、卵を突いたり、くわえたりするのを目撃し、カメラで撮影しました。気づいた親は慌てて、巣に戻ってカラスを追い払いましたが、卵は無事だったのでしょうか。自然界のさまざまな試練を乗りこえて、ヒナを育てなければなりません。（松本）

タンチョウの巣に降りているカラスを追い払いに戻る親

＜会員（7 月 23 日現在）＞

- 運営会員　25 名（北海道 19 名、新潟県・神奈川県・東京都・兵庫県・中国・USA 各 1 名）
- 個人サポート会員　129 名（北海道 70 名、長野県 15 名、東京都 10 名、大阪府 8 名、兵庫県 6 名、神奈川県・千葉県各 5 名、京都府・韓国各 2 名、茨城県・静岡県・愛知県・奈良県・島根県・フランス各 1 名）
- 団体サポート会員　13 団体（北海道 11 団体、大阪府 1 団体、韓国 1 団体）

Tancho Protection Group (TPG) newsletter　TANCHO

Tenth issue　July 2010

＜表紙写真＞

標識後、放鳥され、親元に戻るタンチョウのヒナ

（2010 年 7 月：百瀬邦和撮影）

特定非営利活動法人
タンチョウ保護研究グループ
（編集：松本文雄）
〒 085-0036
北海道釧路市若竹町 10 番 2 号
Tel/Fax 0154-22-1993
e-mail: tancho1213@pop6.marimo.or.jp
URL: http://www6.marimo.or.jp/tancho1213